

67号

# 愛鳥教育

2002.10



全国愛鳥教育研究会

# 愛鳥教育 No.67 2002.10

---

---

## 目 次

学校ビオトープを考える ----- 長屋昌治	3	アイスランドにおける 鳥と人との関係 ----- 箕輪多津男	21
もりまき通信(17) 鳥の羽をひろったら ----- 森 真希	12	編集後記 -----	23
日中朱鷺保護協会の 活動を伝える新聞記事 -----	16	書籍紹介 『カラスの早起き、スズメの寝坊 文化鳥類学のおもしろさ』 ----- 箕輪多津男	24
「第2回 ジャパン バード フェスティバル 2002」のご案内 -----	18		
「トラスト バードウォッチング」 のご案内 -----	20		

# 学校ビオトープを考える

常務理事（江戸川区立南葛西第三小学校） 長 屋 昌 治

地球温暖化を実証するかのような猛暑の続いた2002年夏、岐阜県大垣市で全国ビオトープ・ネットワーク主催による“全国学校ビオトープ・シンポジウム in 大垣”が8月1日・2日の両日に渡り開催されました。

以下、基調講演・分科会の報告と、訪問したビオトープの紹介をしながら、学校ビオトープについて少し考えてみたいと思います。

## 1. 学校ビオトープとは？

最近よく耳にする、学校ビオトープとはそもそもどういうものなのでしょう？

### ①ビオトープとは？

まず、その前にビオトープとは？

ドイツ語のビオトープ(Biotop)のことで、ギリシャ語起源のBios（生き物）とTopos（場所）を合成して作られた言葉です。意味は文字通り、生き物の生息場所。本来その地域にすむ様々な野生の生き物が生きることのできる、ある程度のまとまりをもった場所（森林・湖沼・川辺・干潟など）を指します。自然生態系の構成単位としてこのように空間を捉えると、様々な土地利用に生態系の考え方をより反映させることができます。

日本では、1980年代の終わりに環境NGOである（財）埼玉県生態系保護協会が、ドイツで盛んになっていた、このビオトープの考え方を広く紹介し、その後、'90年代に入ると中央官庁、地方自治体、民間企業などもこの考え方を取り入れるようになりました。コンクリートで固められた河川をもとの野生生物の棲める河川に戻す試みや、各種の生態園の整備、住宅地の緑化など、また、最近では地域の環境NGOなどが中心となって里山の自然を復元したり、自然植生を復元して湖の浄化を図ろうとしたり、といった試みなどにもビオトープの考え方は生かされています。

### ②学校ビオトープの役割

では、学校ビオトープとは？

ビオトープとの大きな違いは、ビオトープが野生生物の立場で管理するのに対し、学校ビオトープは環境教育の場として、教育的見地からの管理を行う点にあります。すなわち、限られた空間や予算の中で、地域のビオトープのミニチュア版を作成、あるいは、現在ある環境を保存することによって、子供たちがその中で日常的に生態系にふれることができるようにし、子供自身が生き物を発見する喜びを知り、生き物を呼ぶための工夫をしたり、管理の方法を学んだりして行ける場とすることが意図されています。

したがって、学校ビオトープは、それがうまく機能すれば、子供たちが身近に自然生態系と触れあい、それを守り育てる体験ができる場となり、さらに、その製作や管理をしていく中で、地域の大人との交流を通じて、自ら環境問題を考え、解決していく手法を学ぶことのできる、なかなか有効な教材であろうと思います。

また、自然環境の特に劣悪な地域では、たとえこのような小さな空間でも、生き物にとってとても貴重な生息空間にもなります。

## 2. 「全国学校ビオトープ・シンポジウム in 大垣」の概要報告

日程： 2002年8月1日 基調講演・分科会 ソフトピアジャパンセンター

2日 見学会、大垣市立小野小学校、東小学校、江東小学校

主催：全国学校ビオトープ・シンポジウム in 大垣実行委員会

共催：大垣市、全国学校ビオトープ、ネットワーク、大垣地域産業情報研究協議会

協賛：(財)土屋環境教育振興財団

後援：環境省、文部科学省、岐阜県、岐阜県教育委員会、岐阜市、大垣市教育委員会、NPO法人自然環境復元協会、日本ビオトープ協会、森と水辺の技術研究会、全国愛鳥教育研究会、(財)リバーフロント整備センター、ぎふまちづくりセンター、大垣まちづくり市民活動支援センター、岐阜県技術士会、岐阜ビオトープ管理士会

### ①基調講演(要旨)

#### 『学校ビオトープの考え方とコミュニティのあり方』

富士常葉大学教授、全国ビオトープ・ネットワーク会長 杉山 恵一 氏

自然環境復元の運動、いわゆるビオトープづくりが今日のように一つの時代の動向となり得たのは、その背景の一つとして、この運動を担う人々に共通に「黄金の日々」としての子供時代の自然体験の記憶があることによるだろう。そして、往時の豊かな自然の中での体験が単独で行われたのではなく、集団つまり子供仲間で行われたことにより、学校による教育以前にあるいは学校以外の場で、人間としてという以上に生物個体として基本的に重要なことを「学んだ」のである。しかし、このような伝統の子供集団とその活動の場であった身近な自然はともに、最近の数十年間に衰退・消滅の一途をたどり、このことが現在の子供たちの心身の発達に大きな問題を惹起しているという認識がなされてきたからである。そして、何よりもまず、自分の子や孫たちにも自分と同様の自然を味わわせたかったからである。

文部科学省も、最近の子供たちの心身の発達面での問題の多発ぶりに抜本的な学校教育の再編をせまられ、その対応の具体的な方法の一つとして2002年度から「総合教育」を取り入れることとした。現在の子供たちに欠けているものに総合能力があるとの認識によるものである。

かつての子供たちは学校以前あるいは学校以外の場での遊びを通じて基礎的な認識、能力を総合的に体得していたが、その「学び」の場があらゆる面で崩壊・喪失してしまった現在では、従来、学校以外の場で学ばれてきた事項を、部分的にでも学校で行わなければならないだろう。いわゆる「学力」の向上以外にこのようなことに時間を割くことに対する

批判が噴出しつつあるが、私は総合的学習に賭けた文部科学省の方針は正しいものと考えている。そして、私自身ができうることは、復元された身近な自然を、子供たちの原体験の場として活用する方法を模索することである。

その方向で考えることに次の二つのことがある。

一つは学校内に最小限の自然環境の場を造成し、生徒が日々接することができるようにすることである。これは、学校ビオトープ作りとして全国に広がりつつある。しかし、現在見られる学校ビオトープは学校内のごく一部を利用した小規模なものが多く、子供たちの自由な振る舞いを許すものではない。ビオトープとしても不十分な内容のものが大部分であり、ビオトープの名は単に目標を示すものと考えた方がよい。ただし、日々接することができ、継続的に観察することができる、という点では優れたものである。

もう一つは従来の林間学校の継続として広大な自然に触れさせようとするものである。こちらの場合、様々な場所が考えられるが、地方には相当広い規模を持つビオトープ公園などがあり、そのようなものは最適であろう。ただし、滞在が許されるのはせいぜい数日程度ということで、十分に自然を体験させることは難しい。

両者に、一長一短ありというところである。

学校ビオトープ作りは現在活況を呈していて、全国ではおそらく千以上の小中学校で何らかのものが作られている。必ずしも学校の敷地内に造成される

わけではなく、隣接する場所に地主の了解と協力のもとに営まれるものもあれば、都市の中心部ではコンクリート校舎の屋上に造成されるものもある。学校ビオトープが意義ある点は、その造成の全ての段階で教師・児童生徒が取り組めること、PTAなど地域社会との協力により、いわゆる「開かれた学校」が促進されることである。

造成の発端は、学校側からあるいはPTA側からの要請によるものがあるが、後者の方が概ねスムーズに行くことが多い。しかし、教師や生徒が傍観者の立場に置かれ、その後の利用・管理の面で、当事者意識が育たなかったというようなこともあり、理想的には、校長が、明確な意志を持ち、熱心な生物系の教師がいて、あるいは教師の提案を校長が引き受けるような形から、全教師・児童生徒・PTAなどに働きかけを行っていくようなものがよく、地域のビオトープ作りに関わった経験のあるナチュラルリストなどの協力も有効である。そして、プランを立てる際に児童生徒が自発的に関わる仕組みを作ることが重要である。イメージをまとめる作業は大変だが、学校ビオトープを実現させるためには自然的な要素の他にも、技術的・経済的な要素、あるいは人の和などの条件も大切であることを学ばせることに

意義がある。実際の造成においては、材料費のみの出費に抑え、作業は児童生徒・教師・PTA有志の活動によって補うことが望ましい。

利用・管理については、当然限度はあるが、学校ビオトープを遠巻きに眺めるのではなく、その中で遊ぶことも許されるべき（少なくとも立ち入りを禁止すべきではない）である。これは、人間、つまり児童生徒・教師たちも学校ビオトープの生態系を構成する生物的要素であり、自然を対象化するという態度ではなく、自然と共生するという考え方が大切であるということ、また、作られたビオトープの生態系は年を経るに従って生物相の貧困化が生じるために、いわゆる「攪乱」も必要となってくるからである。

学校ビオトープ作りは、総合学習の一般化や「開かれた学校」の進展を背景として、今後ますます盛んになるとともに、様々なバリエーションが付け加えられていけよう。次世代を担う子供たちの心身の発達にとって、自然体験はかけがえのないものであるという教育上の意義とともに、都市部の自然化の拠点としても大きな意義があると考えられる。

## ②分科会（演目）

### i) 第1分科会「学校ビオトープの基本的考え方」

- ホタルが舞い、ハリヨが泳ぐ小野小学校 ----- 大垣市立小野小学校
- 背景にあるものから考える ----- (株) 土屋組環境技術センター
- 霞ヶ浦流域の学校ビオトープ・ネットワーク ----- アサザプロジェクト NPO法人 アサザ基金事務局
- 学校ビオトープの基本的な考え方 ----- 全国学校ビオトープ・ネットワーク
- ノスタルジック・2002 ----- 全国学校ビオトープ・ネットワーク

### ii) 第2分科会「学校ビオトープ作りの技術と実践」

- 学校・PTA・地域が一体となったビオトープ作り ----- 大垣市立江東小学校、同小PTA
- 岐阜県立岐阜農林高等学校 ビオトープの概要 ----- 岐阜県立岐阜農林高校
- みんなで取り組む学校ビオトープ ----- 滋賀県蒲生郡安土町立老蘇小学校
- 全国学校ビオトープ・シンポジウムに寄せて ----- 全国学校ビオトープ・ネットワーク
- 第二段階の学校ビオトープづくり ----- 全国学校ビオトープ・ネットワーク

### iii) 第3分科会「コミュニティのあり方と学校ビオトープ」

- 「西美濃学校ビオトープの輪」の紹介 ----- 西美濃学校ビオトープの輪
- 「ビオトープ」を活用した市民参加のワークショップについて ----- 大垣地域産業情報研究協議会
- 刀根山小ビオトープ「刀根山生き物の里」  
～PTA、保護者、地域を巻き込もう。  
開かれたビオトープへの実践と課題～ ----- 大阪府豊中市立刀根山小学校PTA

- コミュニティと学校ビオトープ ----- 滋賀県西浅井町立西浅井中学校  
○コミュニティを形成するために果たすビオトープの役割  
～ビオトープからまちづくりへ～ ----- 大垣市都市計画部

### ■第2分科会に参加して

私が参加した第2分科会では、実際に学校ビオトープを作る際の技術的な話（植栽・水路の設計・費用の捻出・水漏れ対策・業者選定など）を中心に発表がなされました。それに対し、水路設計や植栽についてこれから作っていかうとする人達から具体的な質問が相次ぎ、学校ビオトープ作りに対する熱意が伝わってきました。

また、発表した学校のほとんどすべてが学校単位の取り組みで、実際のビオトープ作成には造園業者が関わっていましたが、最後に、小学校の1クラスだけで、すべて手作りでビオトープを造った事例の発表があり、大規模な学校ビオトープだけでなく、小規模であっても子供主体のビオトープの活動が可能であるという例も提示されました。

### ③学校ビオトープ事例の紹介

紙面の都合で、ここでは見学会で紹介された学校のうち、ホタルの保護育成を核として学校ビオトープを作っている小学校の一例を取り上げて、報告します。

#### ◇岐阜県大垣市立小野小学校

##### ① ねらい

環境の悪化の著しい現在、環境について考えることは時代の責務であり、学校教育の中で「私たちにできる環境づくり」とは何か、環境問題への意識化を図ることが大切であると考え、学社融合の教育として、地域人材講師を年間延べ約800名、および多数の保護者の協力を得て、地域に根ざし、地域に開かれ、地域とともに、潤いと活力に満ちた学校・人や自然と豊かに生きる子供の育成を目指している。

特に、野生生物の保護育成では次のことをねらいとして、ホタルを核とした学校ビオトープ作りの活動を行っている。

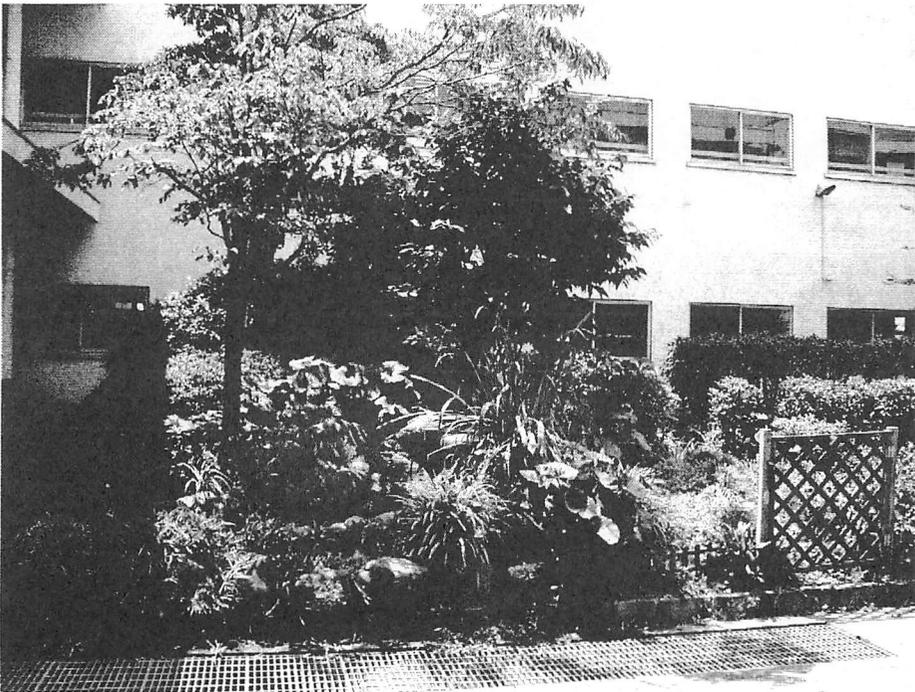
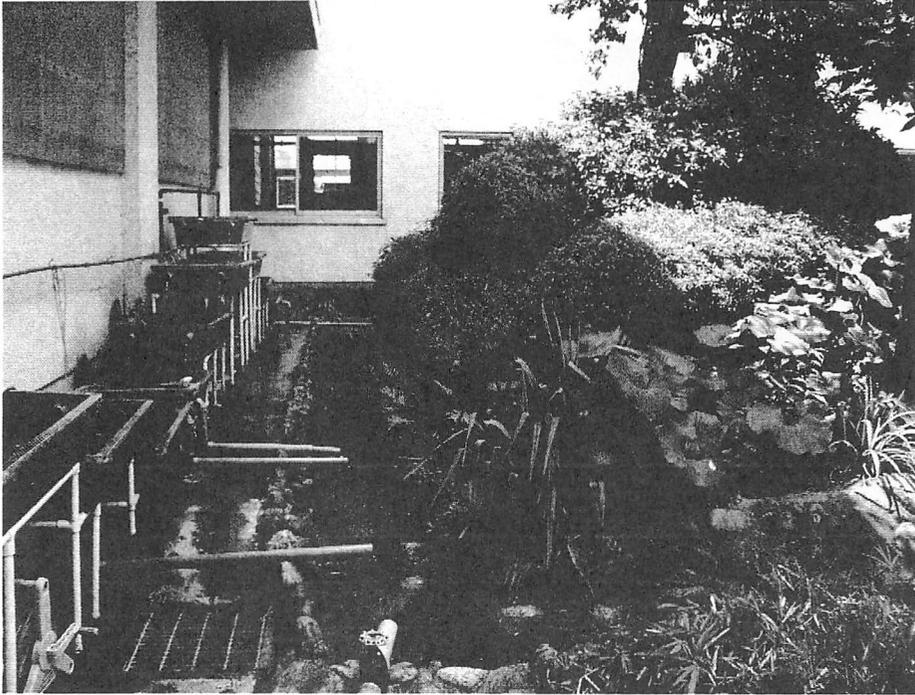
- 自然に親しみ、生きものと身近に接し、命の尊さ、弱い命に耳を傾ける心を育てる。
- 野生生物の保護育成を通して、環境保全の意識の高揚を図る。
- 穴掘り、観察、飼育、ホタル祭などの感動体験を故郷の原風景としての子供のまぶたに残し、郷土愛を培う。
- 地域、保護者、学校が力を合わせた学社融合の教育を実施し、豊かな地域づくりをする。

② 学校ビオトープの構成

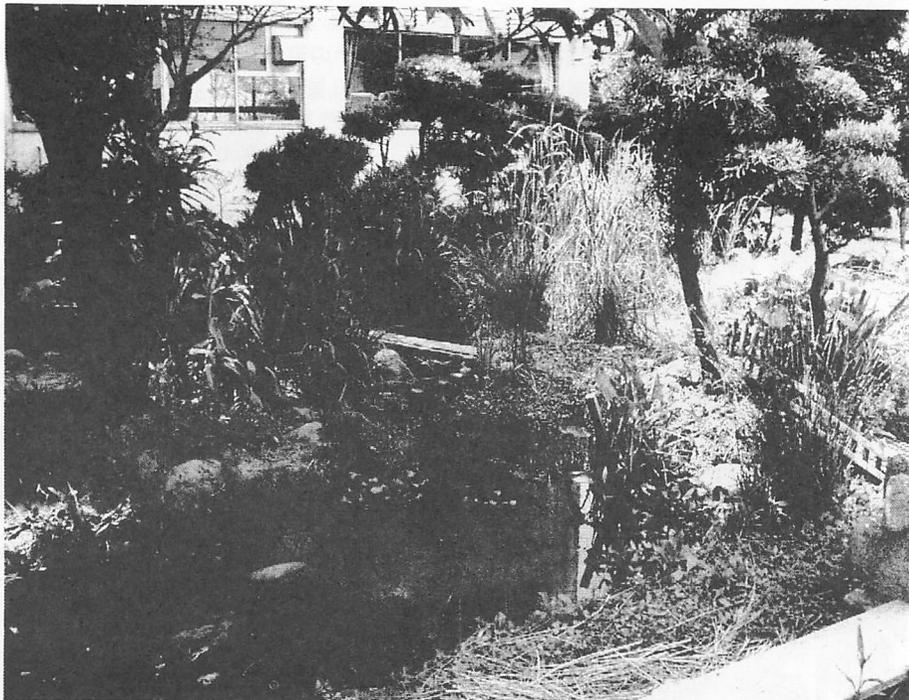
◇すべて学校敷地内で面積合計：約620㎡（260，140，200，20）舗装部分除く

◇ビオトープの要素：池・小川・樹林・草地・石積み・生け垣・湧水・花壇

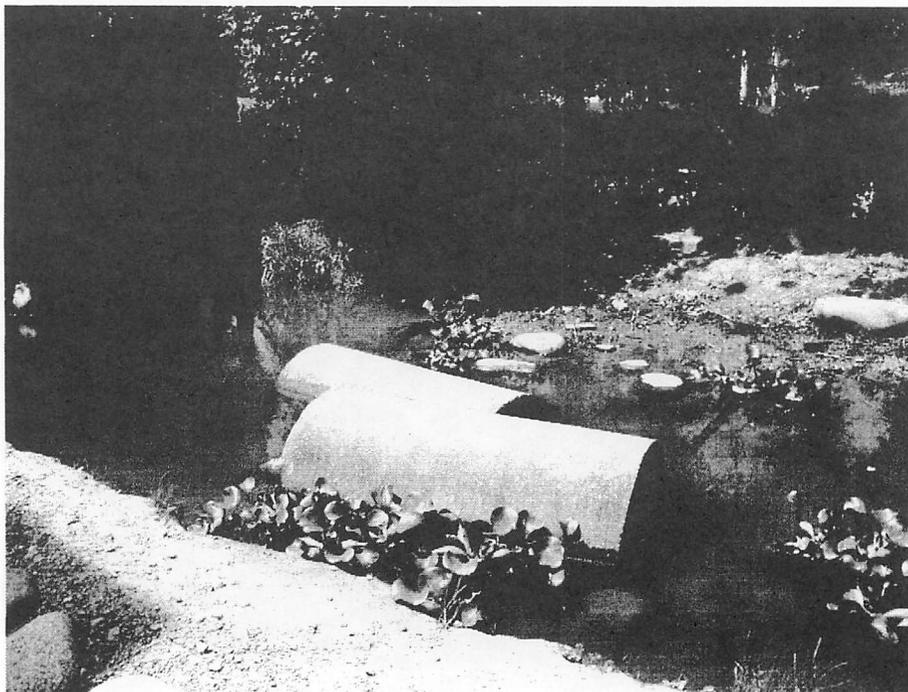
○第1ビオトープ：（ホタルの保護育成空間）ホタル、カワニナの流水多段式人工飼育装置を作り、人工養殖も行っている。ビオトープでの自然産卵も増え、ホタルの乱舞が見られる。



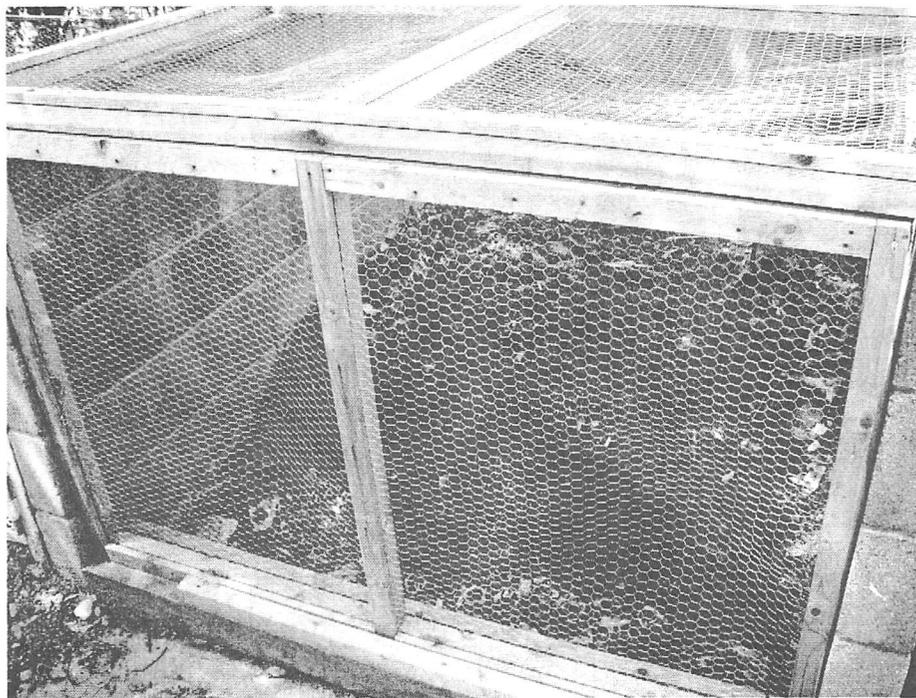
○第2 Bioトープ：（小型魚類と植物の保護育成空間）地下水を利用している為、冬期でも水性植物の繁茂が著しく、常時間引きを行っている。魚類はフナ、ハリヨ、タイリクバラタナゴ等が多く見られる。



○第3 Bioトープ：（大型魚類の保護と児童が水と戯れる空間）休み時間に子供達が裸足になって遊ぶため、岸边には草が生えない。魚類はフナ、ナマズ等が見られる。



○第4ビオトープ：（カブトムシの保護育成空間）おがくずを大量に入れ、カブトムシの幼虫を飼育し羽化させている。



### ③ ビオトープづくりの経緯とその後の管理

「昔、どこにでもいたホタルを子供たちに見せたい。」という保護者の願い。「どうせやるなら、命の尊さ・環境に配慮できる子の育成をしたい。」という教師の願いから始まり、平成10年度はホタル広場（第1ビオトープ）を造成し、ホタルの保護育成に取り組んだ。その成果を生かし、平成11年度は第2ビオトープとして小型野生生物ミニ生息空間を、平成12年度は第3ビオトープとして大型魚類および子供たちが水と戯れる空間を発展的に造成した。

第1ビオトープはホタルに適する川の流れを、第2ビオトープは生き物を分類できるように4つのゾーンの池で構成し、水温調節の工夫を、第3ビオトープは、3つのゾーンで構成し、大型の魚類も棲みやすいように深い部分も作るなど、目的別に工夫して設計した。いずれも現在ある樹木を極力残すよう配慮した。

第1ビオトープは、4年生以上約400名および地域・保護者ボランティアで穴を掘り、仕上げは業者に依頼。粘土と石だけの自然工法で、湧水部分のみセメントを使用。第2・第3ビオトープでは、粘土貼り・石積・井戸水の配管も教師と子供を中心に行い、経費も少なくてすんだ。

その後の管理については、  
 教員：樹木の剪定、水生植物の間引き、水漏れ修復作業、地域の河川でのカワニナ（ホタルの幼虫の餌）採取、水量の調整、ホームページ作成他  
 児童：4年：草取り、落ち葉拾い等の清掃、ホタルの飼育、カワニナ放流、魚の餌やり  
 6年：卒業記念としてビオトープ内の小屋やシンボルトワーにペイント  
 PTA：草花や樹木の植栽、魚類の補充提供、修復作業援助、広報活動他  
 地域住民：ホタル保護育成会の設立、資金援助、樹木や草花の提供他  
 行政：環境木等の提供、修復作業の資金援助  
 造園業者：樹木の剪定

その他：アドバイス  
 など、教員・児童・PTA・地域住民・行政などが連携を保って行っている。

- ホタル・カワニナの流水多段式人工飼育装置を作り、人工飼育も行っているが、自然産卵も増え、6月にはホタルが乱舞し、地域の人も招いてホタル祭りを行っている。
- イタチやカラスによる被害に悩まされたが、深場に移すなどして解決した。
- 地下水を利用しているので、水生植物の繁茂が著しく、常時、間引きが必要。
- 第4ビオトープ（カブトムシの保護育成空間）を作り、雄30匹・雌10匹を放す。来年度が楽しみである。

4 学校ビオトープへの関わりの度合い

	教員	児童	PTA	地域住民	環境NGO	行政	造園業者	その他
ビオトープ名	①②③	①②③	①②③	①②③	①②③	①②③	①②③	①②③
準備計画段階	○○○	△	○					△
設計段階	○○○	△ △	△				△	△
施工段階	○○○	○○○	△△△	△△△		△△△	△	△
育成管理段階	○○○	○○○	△△△	△△△		△△	△△△	△△

①：第1ビオトープ ②：第2ビオトープ ③：第3ビオトープ ○：中心 △：補助 無記入：なし

5 ビオトープの活用と成果・今後の展開

i) 教科との関連

科目	国語	社会	算数	理科	体育	音楽	図画工作
学年	全学年			4・5		4	2 4 5 6
科目	生活	家庭	道徳	特別活動	総合	その他	*
学年	1・2		全学年		4・5	全学年	*

ii) 成果

- 地域人材講師を年間延べ約800人招くなど、学社融合の教育を実践している。
- ホタル鑑賞で学校が地域のコミュニティの場になっている。
- 全校を挙げて継続的・発展的に環境保全活動に取り組み、他校の先導的役割。
- 自然や人と関わり豊かに生きる子供の姿や人々の心と心が通い合う姿がある。
- 子供たちの学ぶ意欲・喜びは、環境保全の意識や生きる力となっている。
- ホタルの幼虫の生育率は記録的で、開発された飼育方法が注目されている。

### iii) 課題と今後の展開

- 今後、第5ピオトープとして野鳥の生育空間を造成し、学校全体のピオトープ化を目指したい。
- 現在市内16小学校の内、3校にピオトープができ、1校が計画中で、これらの学校と情報交換して活用のあり方を探っていききたい。
- 自然環境を自分たちで守ろうとする意識をより一層根付かせたい。

### 3. 感想

今回、初めて学校ピオトープ関連のシンポジウムに参加してみて、やはり、環境問題に対して、学校教育の中でも真剣に取り組んでいかなければならないという時代の空気を感じました。もう、市民の一人一人が環境問題に無関係ではいられない、それほど、環境破壊が身近な問題として意識されてきていることの現れでもあり、環境教育は総合学習の導入とともに今後、ますます充実されなければならない分野であることを確信しました。

環境教育の目標は単に環境の知識を与えるだけのものではなく、環境のことを考え、市民としての役割を果たすことのできる人材を育てるものと考えることができます。今後何世代にもわたって持続可能な社会を作っていくためには、自然生態系をなるべく破壊しないように自らのライフスタイルを変えたり、多くの野生生物と共存できるように、自然生態系と政治・経済・文化などとのつながりを見つめ直したりといった、環境問題解決のための社会的行動ができる人間であることが必要不可欠だからです。

このように考えるとき、学校ピオトープは、環境教育の教材として、なかなか有効であろうと考えられます。

しかし、大きな問題点があることも考えなければいけません。それは学校ピオトープが多様な地域の野生生物が自立して暮らせるように作られた空間であると同時に、それが地域に開かれ、地域の自然の一部を構成し、地域の自然に少なからず影響を与えているということに起因します。

たとえば、特定の種だけを増やすといったことは、子供たちの興味を持続させたり、満足感を与えたり、地域住民との交流を促すといった効果はありますが、あまり増やしすぎると、餌になる動植物を減らしたり、競争する種を駆逐したりなど、その地域の生態系全体のバランスを崩すことになりかねません。

また、その地域で数が非常に減ってしまった種を昔のように蘇らせたいと増殖して放流することは、とてもいいことだと思われがちですが、わずかな数

の親から大量に子供を増やした場合、遺伝的に似通った性質の個体が多くなり、これらを放流すると、わずかに生き延びていた自然の個体にまで遺伝的な画一性が進んで、小さな環境変化や病気の蔓延で、その地域の個体を絶滅へと導く可能性を高めてしまいます。

実際、自然生態系の復元の試みは、最新の多方面の学術的な成果と長期にわたる調査の結果をフィードバックして行われているのであり、総合の学習などで、子供たちの自主性を重んずるあまり、地域の自然生態系に負荷をかけるようなことがないように十分注意して計画を立てなければなりません。そのためには、長年、環境保護に取り組んでいる環境NGOや大学の研究室などの専門的なアドバイスを受けながら進める必要があるのではないのでしょうか。

今回のシンポジウムでは、学校ピオトープの身近な野生生物に係わることによって、自然に興味を持ち、環境問題について考える子供が増えているなどの事例が多く発表されました。今後は、ピオトープに留まらず、自然が多く残された場所へ行くなどの校外学習を多く取り入れて、さらに良質の自然に触れさせることにより、子供たちに本当の自然の素晴らしさや偉大さ、そして貴重さを体験することが大切であると考えます。

#### 《参考文献》

- 学校ピオトープ 考え方 つくり方 使い方,  
(財)日本生態系協会
- 学校ピオトープ事例集,  
阪神・都市ピオトープフォーラム
- 水とピオトープの生きものたち,  
全国学校ピオトープ・ネットワーク(編)
- 環境教育指導資料(小学校編), 文部省
- 多様な生物との共生をめざして  
生物多様性国家戦略, 環境庁編
- 生態系を蘇らせる, 鷲谷いづみ

もりまき通信(17)

## ～鳥の羽をひろったら～

自然観察指導員 森 真希

### ●羽毛

野外で拾うことのできる「フィールドサイン」の一つに、鳥の羽がある。羽、羽根、羽毛とも表記されるこの部品は、鳥が鳥であることの証拠の一つであると言える。そして、1枚の羽は、様々な情報を持っている。また進化のデザインが楽しめる自然界の芸術品でもある。今回は、私流の羽毛の収集法や整理・管理法、利用法などを紹介させていただこうと思う。

### ●収集のきっかけ

10年前、私は千葉県流山市の市野谷の森に通い始めていた。大学のサークルの仲間が教えてくれたフィールド、そこは東京都心から30kmも離れていない場所であるが、オオタカが生息している森であった。花や虫の名を知りたいと、カメラと双眼鏡を持って、約6年間その森に足を運んだ。

そこで私は、林床や倒木の上に残されていた、オオタカが獲物を食べたその現場を初めて目にしたのだが、まるで羽毛布団の中身を散乱させたかのような状態に、自然界の生きる厳しさや凄まじさを感じた。その時拾った羽をサークルの仲間に見せたら「キジバトじゃないか。」と教えてもらった。

羽で鳥の名前が分かるんだということに感動したことが、羽毛への魅力を感じるきっかけとなった。

### ●羽1枚から分かること

特徴が明確な羽からは、状態さえ良ければ、その鳥の名前はもちろんのこと、オスカメスカ、成鳥か幼鳥かということまで確認できることがある。また羽の形によって、翼の羽か、尾の羽か、腹の羽かということも、場合によっては知ることができる。あるいは、拾ったときの状況から、捕食者に襲われたのか、単なる羽の抜け変わり（換羽）なのか、といったことも判断できることもあるのだ。

ある研究者のお話では、飛行機のエンジンに巻き込まれ、ミンチ状態になった鳥の羽からその種類を調べるといふ依頼があったとか。

何年前かに、私はある森で、壊れたエナガの巣を拾ったことがある。巣材はコケ類と羽毛がふんだんに使われていた。調べてみると、フクロウやオオコノハズクの胸の羽や、メジロの翼の羽、キジやコジュケイの体羽など、実に様々な鳥の羽毛が使われていた。この巣を見るだけで、近隣に生息している鳥類の様子ができてくるようだ。

様々なフィールドサインの中でも、それが持っている情報を読み取る面白さでは、羽毛はトップクラスかもしれない。

### ●羽毛の文化誌

羽毛は、今の私達の生活に広範囲にわたってかわりを持っている。そういった例の一つとして、羽毛が使われている生活道具を思い付くままに上げてみた。

- ・高級羽毛布団…アイダーダックが有名、和名はホンケワタガモ。このカモの巣に敷き詰められている羽毛を用いるのだとか。昔はアホウドリの乱獲につながったことも。
- ・釣り…フライフィッシングの疑似餌、毛針。イワナ、ヤマメ、アメマスなどを狙うときに使用。
- ・ファッション…首飾りやドレスの装飾品、扇子など。中世ヨーロッパでは貴族の衣装の為に大量のフウチョウ類の飾り羽が輸入されたとか。
- ・茶道…羽箒（はばき）、炉縁などを掃き清めるのに使用。
- ・文具…羽ペン、羽ほうき
- ・弓道…矢羽、1本の矢に3枚の尾羽が使われる。
- ・民族衣装…パプア諸族やインディアン、イヌイトなどの羽飾り。位によって身につけることのできる羽の種類が決まっているとか。
- ・カー用品…羽ほうき（商品名は未確認）
- ・赤い羽募金の羽…緑の募金もあるが、うわさではニワトリの羽根とか。
- ・正月遊び…羽根つきの道具。ムクロジの種子にニワトリの羽を5～6枚さして作る。
- ・初詣…その年の魔よけのお守りに使う破魔矢。しかし、今ではプラスチック製が多いとか。

と、様々である。

このように「羽毛の文化誌」だけでも大きなテーマになりそうであるが、これはまたの機会に見送ろうと思う。

### ●どうしたら集められるのか

いろいろな入手方法がある。私は、今まで、下記のような方法で羽を収集している。

- (1)野外で拾う
- (2)動物園で拾う
- (3)動物園の方をお願いしていただく
- (4)友人・知人から譲っていただく
- (5)その他

「(5)その他」というのは、具体的には、鳥の剥製を作っている方から直接いただいたり、鳥類標識調査の際に抜け落ちた羽をいただいたりした、ということである。

これらの方法で共通して注意しなければならないことは、「『ワシントン条約』や『特別天然記念物』などに指定されている希少種の羽は、個人では所有できない場合がほとんどなので、関係機関に確認をとった方が良い」ということである。このような希少種は、羽だけでなく骨や角、毛皮なども、その取引が厳しく制限されている。

### ●羽毛ファイルの作り方

私は、羽の大きさや使用目的によって、5つのタイプに分けて分類・保管している。

- (A)チャック付きポリ袋に入れ、小型の収納ケースに入れる。
- (B)チャック付きポリ袋に入れ、大形の収納ケースに入れる。
- (C)ハガキサイズのファイルに入れる。
- (D)A4サイズのファイルに入れる。
- (E)B4サイズのファイルに入れる。

羽の大きさは、メジロの風切羽のように3～4cmもないサイズからコンドルのように1枚の羽が40～50cmにもなるピックサイズまでである。全ての羽を同じ方法で収納することは難しいので、試行錯誤でこのような形で保管するに至った。

まず、入手した羽は、ゴミやダニ、糞、血痕などが付着していることがあるので、できるだけ早めに、ぬるま湯と石鹸で優しく洗う。よくすすぎ、タオル地などの布で羽を痛めないように水分をぬぐい

取る。そして、ドライヤーの弱風か中風で丁寧に乾かす。羽がしっかり乾いたら、羽づくろいをするように形を整える。

この時、温度の高い風をあてると羽が痛むことがある。羽はタンパク質でできているので、変質を防ぐためにも熱風はさけた方がよいと思われる。また、翼の羽などは自然乾燥でもよいが、体羽（胸、お腹、背中等の羽）の場合は自然乾燥では基部の細かい羽糸がからまったまま固まってしまったこともあったので、やはりドライヤーや扇風機の利用をお勧めしたい。

チャック付きポリ袋に入れるときには、ラベルを添えると、その羽根の資料性が高まる。拾った場所、日付、鳥の名前、羽の名前（風切、雨覆、尾羽等）など、分かる限りの情報を記載し、第三者にも伝えられるようにしておきたい。

また、羽の入ったチャック付きポリ袋は、その大きさ別に収納ケースに保管しているが、その中に防虫剤を入れておかないと、せっかくの標本がカツオブシムシなどの食害を受けることになるので注意が必要である。

バインダー式のファイルで保管する時、私は大きさと用途を考慮し、3つに分類している。

一つは、自然観察会用で、持ち歩きやすいハガキサイズのファイル。次は、卓上用の教材としてのA4サイズのファイル。もう一つはA4サイズのファイルでも入りきれない大きさのもの、例えば尾羽が全部そろっているので並べて保管したいという場合は、B4サイズのクリアファイルに入れている。

A4サイズのファイルに関しては、羽根を貼り付ける台紙に「OHPフィルム」を使っている。これは、学会や学校の授業などで、OHPを用いて図面などをスクリーンに映し出すときに使う透明なシートである。

実際に今使っているものは、KOKUYOの「VF-10 100枚入り、A4手書き用」という商品である。文具類の卸売り店では980円程で、比較的安価である。しかし、同じOHP用のシートでも、手書きタイプのもは取り扱いが減ってきているかもしれない。というのも、最近ではパソコンの普及によって、インクジェットプリンタ用やPPC（静電複写機）用

などの方が普及しているからである。しかし、これらは100枚入りや50枚入りで標準価格6000円という値段がついていたりもして、ずいぶんと値段に差があるようである。手元にあるオフィス用品通販カタログで調べてみると、最も手頃な商品がKOKUYOの「VF-1300 100枚入り、A4、再生OHPフィルム」で、定価5400円のもの3780円の価格がつけられていた。次に買うときにはどうしようかと迷う値段である。

OHPフィルムを使い始めたのは、「BIRDER (バーダー)」(文一総合出版)という雑誌に掲載された内容を知ってからである。1997年8月号で「羽毛の不思議」という特集が企画され、ご縁があって私も「鳥の羽コレクター」としてこの号に顔付きで載せていただいた。同じようにインタビューを受けた方に西池毅さんがいらっしゃったのだが、この方の整理方法の中にOHPフィルムを利用した方法が紹介されていて、さっそく真似をさせてもらったという次第である。

OHPフィルムは台紙の色を自由に変えることができるうえに、羽根の裏面も見ることができる。メンディングテープを使って羽根を固定すれば、必要な時に簡単に取り外すこともできる。こういった点で、紙の台紙に貼り付けるよりも、はるかに利点が多い。できれば、携帯用のハガキサイズのファイルも、この方法に切り替えようと思っているところである。

### ●教材としての利用

これまで私が自然観察会の現場で使ってきた手法の中では、ハガキサイズの羽毛ファイルの出番が最も多かったように思える。自然観察会で見られそうな鳥の羽をあらかじめまとめておき、観察できたその場で見せたり、観察会のまとめの際に、羽を見せながらクイズ形式で羽の持ち主を当ててもらったりした。

このハガキサイズのファイルは、携帯のしやすさに加えて、バインダー式なので観察会の状況に合わせて中身を変えられるという大きな利点がある。しかし、野外に持ち出すということは、その分光にもよく当たるので、黄色系統の羽根は退色しやすいといったこともある。実際に、コジュケイのお腹の羽は4年ほどで色褪せてきた。観察会で頻繁に使う羽は消耗品といってもよいかもしれない。手に入りにくい羽は、このような形での利用は避けた方がよい

と思われる。

私がよく出入りしている鳥取県の「米子水鳥公園ネイチャーセンター」では、観察ホールからコガモやカルガモが羽づくろいをしているところを目の前で見ることができる。一例として、ここでの羽の利用方法を紹介してみよう。

まず、初めての来館者の方に、

「コガモの体の脇に光っている緑色の羽をご覧になりますか？」

と尋ね、望遠鏡にその姿を入れて見ていただく。

「あ、見える見える！ きれいねえ。」

という反応があったのを確認して、さらにこんなことを尋ねてみる。

「あの緑色の羽、どれくらい大きさだと思いますか？」

来館者の方は、

「うーん、これくらいかな？」

と指でサイズを示してくださる。そこで、本物の登場。

「これがあの羽なんですよ！」

突然目の前に差し出された、美しい金属光沢を持つ緑色の羽に、ほとんどの方が驚きの声を発する。光の加減によってその輝きも変化し、実際手にとってもらうと羽の細やかさを直に感じてもらうことができる。5cmの小さな羽なのに、鳥を見に来た方に大きな感動を与える力があるのだなど、本物が持つ限りない可能性にますます魅力を感じるのであった。

### ●羽の不思議

羽の不思議は、まさに自然界の不思議である。ある自然番組のお決まりのナレーションに

「不思議をひもとくと、そこには必ず感動があります」

というのがある。まさにその通りである。どうしてこんな模様なのか、どうしてこんな形なのか、1枚1枚がもつ羽の不思議や謎は深まるばかり。だからこそ自然は面白いのかもしれない。

みなさんには、どんな羽との出会いがあるのだろうか。逸話があったら是非お聞かせいただきたい。

# 図解！羽の整理・収納法

①まず羽を入手します。

あ、羽が落ちてるぞ

②ぬるま湯と石けんでよく洗います。

あわあわ

③水かぬるま湯でよくすすぎます。

ばしゃばしゃ

④タオルなどで水気をしっかりふきとります。

ふきふき  
もみもみ

⑤ドライヤーや扇風機で乾かします。

ゴキーン

⑥手で羽づくろいをするように形を整えます。

ささくれていも  
整えれば  
羽は元に戻ります。

⑦チャック付きポリ袋に入れます。

アオサザ  
尾羽  
1998.10.5  
永渡寺町  
シバルも忘れずに！

⑧防虫剤と一緒に収納ケースに入れて保管します。

防虫剤  
衣装ケース  
とか  
ビニールケースに入れたり

⑨ファイルで保管する場合は台紙を用意します。

クワファイル  
OHP  
ファイル  
色紙は好みで白・黒・灰色など

⑩マディングテープで固定します。

半透明のテープ  
カシオの本々カードに  
印刷してラベル。  
シールタイプでOHP  
ファイルには貼る方がいい。

⑪ファイルに入れて出来上がり。

集まってきたら、  
「フクロウ目」とか  
「カモ目」などに  
分類すると検索し  
やすくなるかも。

日中朱鷺保護協会の活動を伝える新聞記事の紹介

実物大の木製模型を製作

日中朱鷺保護協会 学校に貸し出しへ

能登の空に再びトキが舞う日が来るようお願いを込めて活動を続ける特定非営利活動(NPO)法人・日中朱鷺保護協会は、子どもたちにトキへの理解を深めてもらう目的で、実物大のトキの模型製作に取り組んでいる。模型製作は初めてで、広く小中学校の環境教育教材用として貸し出すほか、同協会の活動に利用する。

色、質感にこだわり



慎重に仕上げの色塗りが行われるトキの模型  
|| 羽咋市千里浜町の中江循さん方

かつて能登に生息していたトキのはく製は、県内で地元羽咋市鹿島路小と県立歴史博物館に二体が保管されている。しかしトキは国の特別天然記念物であるため、はく製といえども持ち出しには環境省の許可が必要で手続きに時間を要し、外部への貸し出しが容易に出来ないという。模型は木製で、くちばしから尾までが六十三センチ、高さ四十八センチ、重さを含めると五十五センチの大きさになる。会員の手で彫られた模型は、村本義雄会長も||羽咋市上中町||らのアドバイスを受け、足の部分や羽先に慎重に細工を施すなど少しでも実物に近づける工夫が凝らされた。模型製作は、仕上げの色塗りの段階で今月中に完成の予定。色塗り作業を託された羽咋市千里浜町、中江循さん(60)は鹿島路小のはく製を参考にし、写真集と首っ引きで取り組んでいる。中江さんは「くちばしと足の鮮やかな朱色、羽毛の淡いピンク色、特に羽毛の柔らかな感じを出すのに苦心する」と奮闘中だ。村本会長は「トキが能登からいなくなってきたり歳月がたった。少しでも多くの子どものためにトキを知ってもらうための模型製作で、あらためて環境保全の大切さを訴えたい」と話した。

北国新聞 2002年(平成14年)8月22日(木曜日)『能登のトキ 環境教育に』

本会顧問をお願いしている村本義雄氏から、同氏が会長を務めていらっしゃる日中朱鷺保護協会の活動を紹介する新聞記事が送られてきましたのでご紹介します。

# 中国・トキの里へ学用品

## 筆記具や700人分の机

### 日中朱鷺保護協会が洋傘支援 児童の手紙にこたえ

特定非営利活動(NPO)法人・日中朱鷺保護協会は、来月二十日からの中国トキ視察団派遣を前に、訪問先である陝西省洋県の小学校に約七百人分の机と筆記具を贈る。村本義雄会長(右)「羽咋市上中山町」の元に今年三月、現地の小学生から届いた手紙がきっかけとなり、民間交流を深めるため支援を決めた。

村本さんは、野生のトキの生息地である陝西省を何度も訪れ、保護センターや小学校を視察してきた。手紙を送ってきたのは洋県平溪村小の何丹同小では、一九九八年



中国の子供たちに送る筆記具をまとめる村本さん  
—羽咋市上中山町

成十年に「トキ保護観察班」を組織し、児童らが活動を続けている。手紙には、愛すべきトキ保護のための知識を分けてほしいということ、できれば

学習条件の改善に協力してほしいということが書かれていた。十分な筆記用具がなく、机といすの足は折れ、校内の危険箇所も修理できず学校の床や壁には穴があいている状態だという。

日中朱鷺保護協会は、平溪村小にクレヨンやペーパーケース、ノートなど約二百点を送ることにした。さらに同協会が集めた募金で、同小を含む洋県の七校の児童と教師、六百七十八人分の机といすを贈るため、現地の業者に発注を済ませた。

村本さんは「政府間、各地方自治体の首長同士だけでなく、民間での交流が必要な時代。トキの保護をきっかけに、民間での交流につなげた」と話した。支援物資は九月上旬に児童の元に届く予定となっている。

<後援行事のご案内>

## 『第2回 ジャパンバードフェスティバル 2002』

昨年に引き続き、千葉県我孫子市において、鳥にまつわる一大イベントである標記のフェスティバルが開催されます。

当研究会は、本年度も後援団体として参画し、N G O団体の一つとしてブースを構え、(N P O)環境学習研究会の協力のもとに工作教室等を展開する予定です。

会場には全国各地から、様々な活動グループが参集し、自然保護や環境教育に関連した情報提供や催しものの展開がなされることとなりますので、是非この機会に会場まで足を運んでみてはいかがでしょうか。事前の申し込みは一切必要ありませんので、どうぞ気軽にご参加ください。

### 記

#### 1. 主催

「ジャパンバードフェスティバル実行委員会」  
(構成団体) 我孫子野鳥を守る会、こちどりの会、日本バードカービング協会、(財)山階鳥類研究所、(財)日本鳥類保護連盟、(財)日本野鳥の会、我孫子市、我孫子市鳥の博物館、日本ワイルドライフアート協会、(株)文一総合出版、エコツーリズム推進協議会、(社)日本望遠鏡工業会、(株)阪急交通社

#### 2. 後援

文部科学省、環境省、国土交通省、千葉県、千葉県教育委員会、(予定を含む)日本鳥学会、全国愛鳥教育研究会、北海道海鳥センター、中央学院大学、川村学園女子大学、サントリー(株)、東日本旅客鉄道(株)東京支社・千葉支社、(財)電力中央研究所、我孫子市商工会、松戸市、野田市、柏市、流山市、鎌ヶ谷市、印西市、沼南市、関宿町、取手市、利根町、牛久市、豊岡市、出水市、米子市、豊栄市、国頭村、他

#### 3. 協賛

サントリーフーズ(株)、我孫子郵便局、千葉県野鳥の会、他

#### 4. 開催趣旨

自然のシンボルである鳥たちの魅力を題材とした芸術的、文化的な事業をはじめ、科学的な鳥類知識の普及および教育的、環境的視点に立った事業の実施を通して、新しい地域文化の創造と人と鳥とが共存する豊かな生活を目指していく。あわせて、日本各地にその情報を発信し、芸術文化の素晴らしさや身近な取り組みから自然環境の大切さをアピールしていく。

#### 5. 開催日時

11月16日(土) 9時00分～16時30分  
11月17日(日) 9時00分～15時00分

#### 6. 会場

##### ■千葉県手賀沼親水広場及び芝生広場

〒270-1146 我孫子市高野山新田193  
TEL) 04-7484-0555 FAX) 04-7484-0936

##### ■我孫子市鳥の博物館

〒270-1145 我孫子市高野山234-3  
TEL) 04-7185-2212 FAX) 04-7185-0639

<交通手段>

J R (常磐線・成田線) 我孫子駅～阪東バス市役所経由 東我孫子車庫行または湖北駅南口行～「我孫子市役所」下車徒歩5分

##### ■我孫子市生涯学習センター「アビスタ」

〒270-1147 我孫子市若松26-4  
TEL) 04-7182-0515 FAX) 04-7165-6087

<交通手段>

J R (常磐線・成田線) 我孫子駅～阪東バス市役所経由 東我孫子車庫行または湖北駅南口行～「手賀沼公園」下車徒歩3分

##### ■アビーホール

(全国野生生物保護実績発表大会/16日)

〒270-1145 我孫子市本町3-2-2 8  
イトーヨーカドー・3F

TEL) 04-7183-3732

<交通手段>

J R (常磐線・成田線) 我孫子駅から徒歩3分

7. 主な内容

- \* 全日本バードカービングコンクール作品展
- \* ワイルドライフアートの展示
- \* 鳥学講座の開催
- \* アホドリ展示および鳥島での誘導作戦のビデオ映像
- \* 庭に鳥を呼ぶコーナー
- \* 鳥に関して活動している行政、民間団体のブースの設置
- \* 手賀沼噴水前および湖上からのバードウォッチング
- \* 映像作品の上映およびゲストによるトーク

- \* 千葉県愛鳥モデル校の活動の紹介
- \* 第37回全国野生生物保護実績発表大会の開催
- \* 企画展「日本の鳥」の展示
- \* その他

8. 問合せ先

我孫子市企画調整室 担当：大畑様  
 〒270-1192 我孫子市我孫子1858  
 TEL) 04-7185-1111 (内線273)  
 FAX) 04-7183-0066



# トラスト バードウォッチング [入門編]

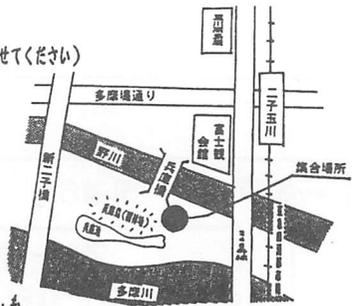
## ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)を使ってバードウォッチング!

せたがやトラスト協会の《トラストバードウォッチング》は、今年も12月の第2土曜日に二子玉川の兵庫島公園で行います。

北国から冬鳥たちがたくさん渡ってくる多摩川。この最高のシーズンに、だれでも参加できるもつともやさしいバードウォッチングを行います。どなたでも参加できますので、お友達をさそいあって、どうぞ気軽に参加してください。

※つぎの内容と申し込み方法をよく読んで応募してください。お待ちしております。

- ◆ **日時** 平成14年12月14日(第2土曜日)  
午前9時15分～11時30分(9時15分までに受付をすませてください)
- ◆ **場所** 兵庫島公園(集合場所は「兵庫橋」です)  
(東急田園都市線[二子玉川駅]より徒歩3分)  
※兵庫橋に直接集まってください



- ◆ **持ち物** 筆記用具・防寒着・雨具・双眼鏡(あれば)  
もっている人は「ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)」も。  
(※当日、受付でも販売しています。1冊50円です。)
- ◆ **服装** 冬の河原は風が強く大変寒いです。毛糸の帽子や手袋などであたたかくし、歩きやすいくつをはいてきてください。

- ◆ **参加費** 無料です
- ◆ **雨天の場合** 中止 ※なお、当日天候により判断のつかない場合は、  
せたがやトラスト協会 ☎3789-6112へ午前8時～よりお問い合わせください。

- ◆ **注意** 子どもたちどうしの場合は、家族の人に  
「いつ・どこで・だれと」を必ず言ってから参加しましょう。



### [申し込み方法] (傷害保険加入の為、次の項目①～④をお書きください)

- (ハガキで) ①「トラストバードウォッチング」参加希望と書いてください  
しめ切り ② 名前(家族や友達も参加する場合は全員の名前と人数)  
12月13日(金)必着! ③(昨・今・明の3日)代表者の住所と氏名、年齢、電話番号  
④ 学校での参加の場合は学校名と学年もお願いします

〒157-0066 世田谷区成城6-2-1 (財)せたがやトラスト協会  
「トラスト バードウォッチング」係まで お申し込みください。



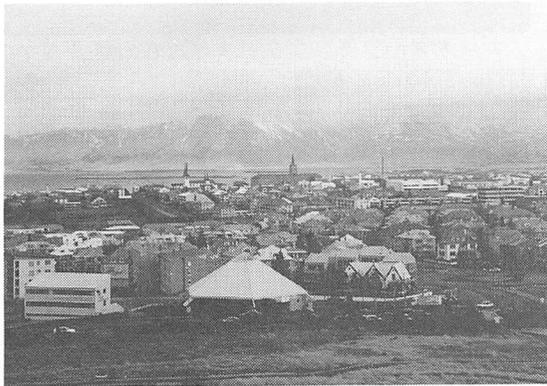
主催：(財)せたがやトラスト協会  
後援：(財)日本鳥類保護連盟  
全国愛鳥教育研究会

# アイスランドにおける鳥と人との関係

事務局 箕輪 多津男

地球の北極圏に添うようにして浮かぶ島、それがアイスランドである。地殻の変動を伝える火山と北の果ての氷河が同居する島でもある。

そうした地理上の条件から、誰もがまず気候の厳しさを想像するに違いない。確かに氷河地帯やその周辺の気候は大変厳しい。ところが、首都レイキャビックなどが位置する島の南西方向の海岸地域等は、以外なほど穏やかな気候である。それは、中米・カリブ海から北上するメキシコ湾流とそれに続く北大西洋海流という大きな暖流が、南西方向からアイスランドにまで達しているからであり、その周辺では真冬でも雪が少しも積もらなかったりする。また、ここは火山の島であると冒頭に述べたが、そのおかげで各地に温泉が湧いており、その豊富な資源はパイプラインで各地に運ばれ、入浴のみならず暖房用として広く利用されている。

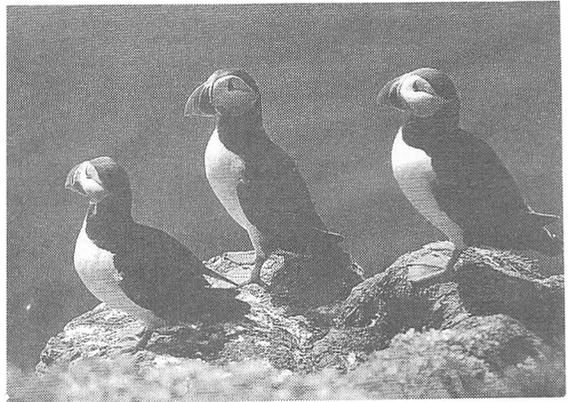


首都レイキャビック

さて、こうしたアイスランドにおける鳥と人との関係について、今回は見てみることにしたい。

まず国鳥にはシロハヤブサガが指定されている。日本へも北海道を中心に時折訪れてくれるが、アイスランドでは大変ポピュラーな種である。また、猛禽類のもう一つの代表はオジロワシである。スカンジナビア半島などでは、このオジロワシとイヌワシが競合している地域もあるようだが、アイスランドにはイヌワシは生息していないので、大型猛禽類では随一のものと言ってよい。地元で売られている絵は

がきなどにも、オジロワシの写真には「The King of Birds」などとキャプションが付けられている。



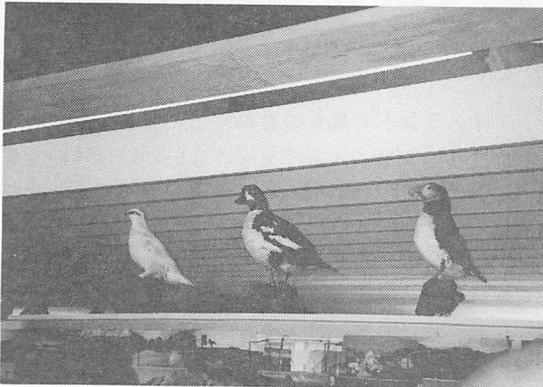
ニシツノメドリ

アイスランドで最も愛され、また有名な鳥というよりはニシツノメドリを挙げないわけにはいきまい。この鳥は、わが国でも北海道の周辺でごくまれに見ることができるツノメドリに大変よく似ているが、ツノメドリが北太平洋に生息するのに対し、こちらは北大西洋に生息している。ことにアイスランドにおいては、繁殖期ともなると、島の岩礁地帯など、海岸沿いのいたるところでその姿を見ることができる。その鮮やかな色をした大きな嘴と愛くるしい姿は、一目見たら忘れられないほど鮮烈な印象を与えてくれる。

ところがこのニシツノメドリ、海岸沿いに住む一部の人々の間では、今だにたんぱく源、すなわち食用として採られているのである。採取方法はごく簡単で、いわゆるたも網のようなもので、崖辺近くに飛んでくるところを捕まえるのである。そこで私が思い起こしたのが、石川県の片野鴨池で今も行われている、カモの「坂網罟」である。スタイルは若干違うものの、1回に数羽程度を捕獲し、必要以上の数は絶対に捕らないという姿勢、そしてごくシンプルな方法により、他の生物には全く影響を与えないよう十分な配慮がなされている点など、共通するところが多いように思う。

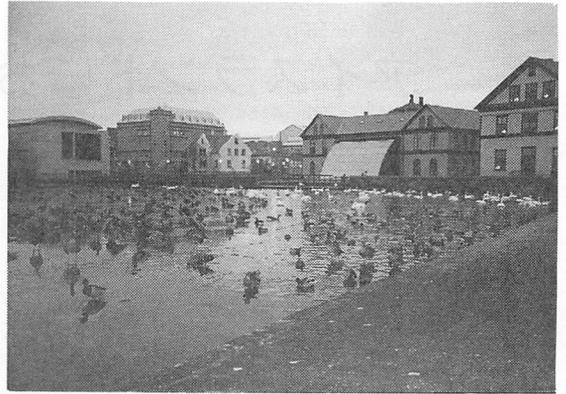
採取と言えばアイスランドでは、土産物屋などに行くと、鳥の剥製が売られていることが多い。今挙げたニツノメドリをはじめ、ライチョウ、ワタリガラス、キタホオジロガモなど、相当数が常に店頭で並んでいる。これなどは現在の日本では考えられないことであるが、そうした野鳥が剥製として平然と売られているということは、逆にそれだけ今だに個体数がどの種も安定しており、捕って食べたり、また剥製にしたりしても総数には大した影響を与えていないという事実が、裏に存在していることを意味する。さらに言えば、北の果ての地ということもあり、人の手のほとんど入っていないような自然がそれだけ多く残されているということなのである。

鳥を捕ることを推奨するわけにはいくまいが、しかし、アイスランドのように「捕っても影響の出ない状態」というのは、日本の現状からするとうらやましい感じもする。日本でも江戸時代以前にはあらゆる種がそうした状況であったはずであるが、今となっては夢物語りとなってしまった……。

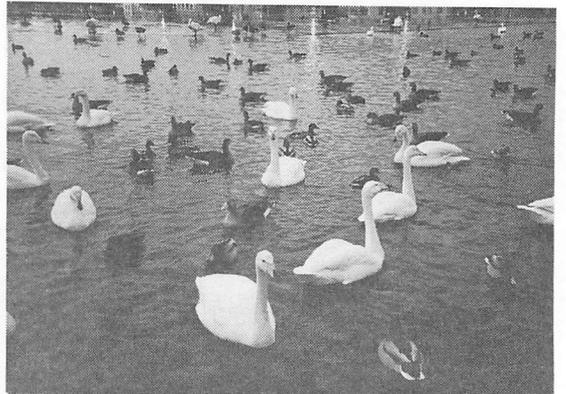


売られている鳥の剥製

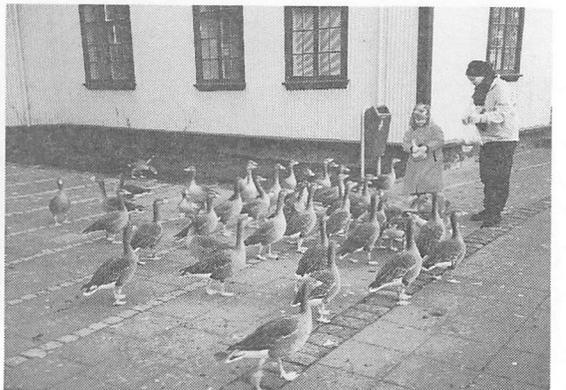
一方、冬場に首都レイキャビックの郊外にある池などを訪れてみると、日本と同じようにカモ類やハクチョウ類が羽を休めている姿を間近に眺めることができる。そこで目立つのはオオハクチョウやマガモ、そして何よりマガンの亜種であるキバシマガンである。アイスランドはハイロガンや一部ヒシクイの繁殖地としても有名なのであるが、冬場はそれと入れ代わるようにキバシマガンが目立ってくる。このキバシマガンはグリーンランドで繁殖し、このアイスランドやイギリスさらに西ヨーロッパ等に渡ってそこで越冬する。



レイキャビック郊外の池の様子



オオハクチョウなど水鳥たちの様子



キバシマガンに餌を与えている親子

眺めていると分かるが、日本ではおよそガン類は人に慣れることはないと言われているが、キバシマガンは人を恐れる気配が全くない。いやむしろ近づいてくる。それもそのはずで、彼らに餌を与える人がいるのである。かと言って、ここで上野の不忍池のような光景を想像してもらっては困る。人と言ってもごくまれに数名が寄る程度で、それは静かなものである。それでもガンたちは餌を与えてくれるこ

とを知っていて、餌を持つ人が現れるとそちらに集まり、きれいな行列を作る。日本では餌をやることの是非が、鳥類保護上の大きな問題として取り上げられることも少なくなく、私自身もドバトやカラスなどにエサをやらないう、たびたび呼び掛けを行ったりしているものの、アイスランドで見たのどかな光景は、どうもそうした議論がそぐわないほど穏やかな印象を受けるものであった。

アイスランドは、総人口が30万人にも満たない国である。また冒頭でも述べたように氷河と火山に代表されるような島であるので、人の住んでいる地域もごく限られている。そのことが幸いしてか、野鳥の生息に適した自然環境もかなり多く残されている。と言っても、もともとが特殊な環境なため、そこに生息している鳥種は限られているが、それぞれの種の個体数は多くしかも安定している。

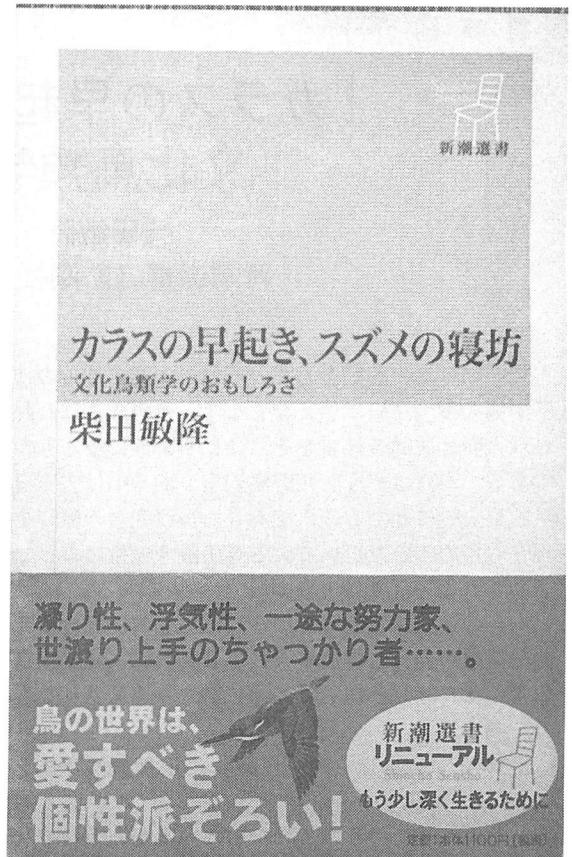
そして、そこにある鳥と人との関係は、規制することが何ら意味をなさないほど、ありのままで穏やかである。事の是非を問えば、捕獲の問題など疑問を投げかけたくなる点もあるかも知れないが、アイスランドの状況を一つの実例として、今一度原点にもどり、鳥と人との共存について考えてみたいと思った次第である。

## 編集後記

従来、校庭の一角に餌台や水飲み場を設置して野鳥を呼び込み、観察するための環境を整備しようという活動がなされてきましたが、近年、ビオトープの考えの中に集約されてきているようです。しかし、一方で、特定の種の飼育や移入種の問題などが改めて問題になってきています。野鳥を窓口に広く自然を見ていこうという愛鳥教育の視点の意味を再確認したいものと思います。

もりまき通信(17)では、鳥の羽の整理と活用法について、図入りで解説していただきました。観察会の教材教具としての活用を考えることで、単なる収集の域を脱することになると合点がいきました。

昨年に引き続いて「第2回 ジャパン バード フェスティバル 2002」が、また「トラスト バードウォッチング」が開催されます。皆様、奮ってご参加下さい。(染谷)



解説は P24 に掲載してあります。

## 愛鳥教育 No.67

平成14(2002)年10月31日

発行人 杉浦嘉雄  
 発行所 全国愛鳥教育研究会  
 住所 〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5  
 第10田中ビル3F  
 (助)日本鳥類保護連盟内  
 電話 03-5378-5691  
 FAX 03-5378-5693  
 会費 3,000円  
 郵便振替 00180-7-12442  
 印刷所 祐文社

# 『カラスの早起き、スズメの寝坊 文化鳥類学のおもしろさ』

柴田敏隆 著 2002年7月

新潮選書（新潮社）定価（本体）1,100円

事務局 箕輪 多津男

長い間野鳥の観察をしていると、次第に彼らの様子が他人事(?)に思えなくなる、というよりわれわれ人間と共通の性質をそこに見るようになるものである。本書はそうした野鳥観察、あるいは広く自然観察全般にわたる達人であり、当研究会の顧問を現在も務めていただいている柴田敏隆先生によって著わされたネイチャー・エッセイ集である。

内容のベースとなっているのは、以前、総合研究開発機構が発行している『NIRA』に、「文化鳥類学こぼれ話」と題して32回にわたり連載されたものである。

全体が「Ⅰ 鳥社会の不思議」「Ⅱ 驚異の身体システム」「Ⅲ 自然界のバランス」「Ⅳ 野生と適応」という4つの章だてとなっているが、それぞれの章に含まれている一つ一つの文章は、みな独立した内容となっているため、どこから読みはじめてもすぐにその「文化鳥類学」の世界に浸ることが可能である。

仲間同士のコミュニケーション、雌雄の別と性的役割の違い、繁殖の形態、感覚器官の機能、食性と採餌方法、生息環境、そして個々の行動特性など、鳥の世界とその社会の成り立ちを実に様々な切り口から披露してくれている。

一方、人間の社会を面白いようにそれに重ね合わせながら、縦横無尽にこれを論じている。こちらの切り口も、歴史的考察から文学、宗教、音楽、社会問題、そして身近な風俗や慣習、流行に至るまで実に幅広く、その記述をたどるだけでも興味が尽きない。

こうして、鳥の世界と人間の世界を行ったり来たりしているうちに、いつしかそれが同じ時を刻む一つの世界として融合していくのを実感する。

結果として、われわれ人間の言わば隣人(?)として生きている鳥たちの存在が、今さらながらこの上なく愛しいものとして意識されるようになるので

ある。同時に、鳥たちの社会を時には破壊し、時には思うままに蹂躪してきた人間の活動そのものに対する、大いなる反省と深い悔悟の念が呼び覚まされることになる。

近年は、人間と野鳥あるいは野生生物との共生ということばを度々耳にするが、それをごく自然な姿で実現できるとすれば、まずは多くの人々が野鳥に親しみを持つようになることが、そのスタートラインとなるに違いない。親しみを持ってない隣人と、社会、いや世界を共有することなど土台無理な話であろう。なればこそ、人々が野鳥を身近に感じられるようになるための普及活動、すなわち愛鳥教育活動がやはり重要であると改めて感じる次第である。

本書の挿し絵は、近年惜しまれながら亡くなられた故藪内正幸画伯の作品で彩られている。どの絵にも野鳥に対する深い愛情が滲み出ており、それぞれの鳥が同じ動物仲間であることを語りかけてくれているようである。

本書が、これまでほとんど野鳥の存在を意識してこなかったような人々にも広く読まれ、人間社会と鳥の社会が時間と空間を共にすることの意義が、深くそうした人々の心に浸透していくことを願ってやまない。

何より内容が面白く、時に専門的な内容が語られているにもかかわらず大変読みやすい。ひとりでも多くの人々が手にしてほしい一冊である。

写真はP23に掲載してあります。

